# 児童期から成人期前期までの「居場所」経験の移行プロセス
## ――回想法を用いて――

石　神　愛　海

1980年代後半の不登校児童生徒の増加が契機となり，「居場所」という言葉に「安心して自分らしく居られる場所」等の心理的意味が付与され，日常語として広く用いられるようになった。また，心理臨床実践において「居場所」はクライエントの心理的苦痛の表現や病態理解の手がかり，支援の方法となる重要な概念として用いられている（中藤，2017）。「居場所」は社会を生きる人間にとってなくてはならないものであり，心理的適応や学校適応に影響を与えつつ，人の心理社会的発達に伴い変化していると考えられる（杉本・庄司，2006：則元，2008：石本，2010：石本・西中，2017）が，「居場所」の発達的変化に関しては，幅広い発達段階を対象とする質的縦断研究は殆ど行われておらず，十分に明らかになっているとは言えない現状にある。「居場所」が各発達段階において，人の社会適応や発達的移行にどのように関わるのかを明らかにする事で，不登校児童生徒の「こころの居場所づくり」や，幅広い年代のクライエントの一助となり得ると考えられる。そこで本研究は，回想法を用いて質的研究を実施し，「居場所」の発達的変化と社会適応との関連について仮説を生成する事を目的とした。

20代社会人12名の研究参加者を対象にし，60-90分の半構造化面接を実施した。面接においては，児童期–青年期前期–青年期中期–青年期後期–成人期前期の各時期における「居場所」経験，「居場所」への主観的意味付け等を尋ね，音声記録を基に逐語録を作成し，木下（2020）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。本研究においては，主観的条件（住田，2003）を優先し，研究参加者が自由回答の中で「居場所」として挙げた場や関係性を「居場所」と見なした。また，研究参加者が各自の「居場所」において感じる気持ちや感覚を「居場所感」と位置付けた。そして，Erikson（1959 西平・中島訳 2021）が提唱した理論に基づき，心理社会的相対性を持つ概念の発達を指して「心理社会的発達」という言葉を用いた。

分析の結果，児童期から成人期前期までを通した，主要「居場所感」の発達的変化と，各発達段階における「居場所」と「居場所感」の力動的関係性が，個人の社会適応や心理社会的発達を支え，促しているという仮説・関係図が生成された。また，葛藤的「居場所」においては，「居場所」と「居場所感」の相補性が自己を治癒しようと働き，否定的「居場所感」を共受容できる対人関係が促進要因となり，高次の「居場所感」の獲得や心理社会的発達を支えると考えられた。本研究は，「居場所」が各発達段階において，人の社会適応や発達的移行にどのように関わるのかという仮説を示した点に意義があると考えられる。今後の課題としては，量的研究によって仮説を検証する事や，不適応水準の「居場所」経験とその治癒プロセスを明らかにする事などが挙げられる。